

# 新婦人しんぶん

## 新日本婦人の会目的

- ☆核戦争の危険から女性と子どもの生命をまもりまします。
- ☆憲法改悪に反対、軍国主義復活を阻止します。
- ☆生活の向上、女性の権利、子どものしあわせのために力をあわせまします。
- ☆日本の独立と民主主義、女性の解放をかちとりまします。
- ☆世界の女性と手をつなぎ、永遠の平和をうちたてまします。

## 今週の紙面

- 2面 女性ニュース/国会
- 3面 読者のページ/まんが/俳句
- 4面 年金相談/女性史散策/人「性」いろいろ/韓国から
- 5面 憲法のはなし/ホット
- 6面 きれいな姿勢と健康/もう一品/母の歴史
- 7面 新婦人のページ/主張/北京+25



兵庫・西宮市 小川豊子 (75)

新日本婦人の会は国連に認証されたNGOです

# 食品ロス 廃棄前提は時代おくれ



コンビニの棚には食品がずらりと並ぶ



エスディージーズ SDGs 持続可能な開発目標

# 消費者の声が社会をつくる

「食べられるのに捨てられてしまう」食品ロス問題。日本でその量は年間612万トンです(グラフ)。本紙「衣料品ロス」(7月30日号)が大きな反響を呼んでから4カ月。「大量廃棄社会とアパレルとコンビニの不都合な真実」(光文社)の共同執筆者で、節分に向けて販売される恵方巻の廃棄問題を記事にした仲村和代さんに聞きました。

朝日新聞記者 仲村和代さん

## 恵方巻問題が動かし

私が恵方巻の問題に着目したのは、ツイッターなどで5年ほど前から話題になっていた「ノルマ問題」がきっかけです。高校生のアルバイトにまで販売ノルマが課せら

れ、自腹で買わされているという訴えの背景に何があるのか、取材を始めました。

そこで見たのが、ノルマの裏側の廃棄問題。18年には、捨てられた恵方巻が食品リサイクル工場に大量に持ち込まれていることを報じました。節分の日の夜、デジタル版で動画と共に配信したところ、かなりの反響がありました。

ただ、恵方巻の廃棄は食品ロスの中のごく一部。関心をさらに広げてもらおうと、こうした問題は日常的にあり、私た



なかむらかずよ 朝日新聞マーケティング部ディレクター。2002年朝日新聞入社。2010年から東京社会部。広島市生まれ

ちは毎日、1人茶碗1杯分のごはんを捨てている計算になる、といったことにも触れました。翌年には、国が需要に見合った販売を呼びかけるなど、少しずつ変化が。関心の高まりが政策を後押しし、19年の「食品ロス削減推進法」制定にもつながったと感じます。

## 廃棄前提の「コンビニ商法」

恵方巻の問題は、コンビニのシステムとも関係していました。コンビニ

店を取材すると、売り手側は、「コンビニの棚が開いていると消費者は買う気がなくなる」「すぐ手に入らないと買ってもらえない」と考えています。商品は廃棄される分を含んで値段がつけられます。「コンビニ会計」といわれる独自の会計システムで、食品廃棄の費用の大半は店が負担することになっており、フランチャイズ本部は廃棄が出ても多く発注するよう求めるという構造的な問

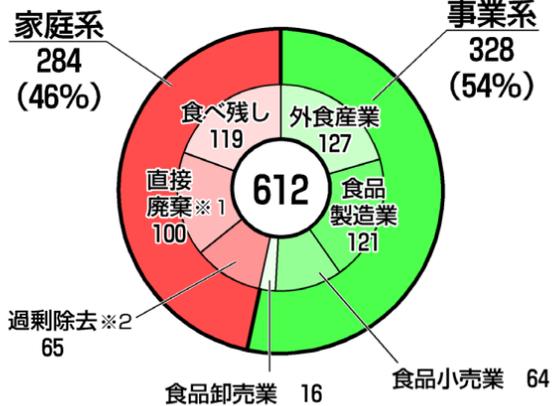
## 食料が必要なところへ

食料が余って処分にもお金がかかる一方、まだ食べられるのであればほしい、というところもあります。それらをつなぐ仕組みがあれば解決することがたくさんあるはずですが、今は主に民間でそういった取り組みがされています。今は主に民間でそういった取り組みがされていますが、公的な仕組みができたなら、必要どころにもっとうまく食品が回るのではないのでしょうか。

〈2面〉

## 日本の食品ロスは年間612万トン!

(2017年度) 単位: 万トン



※1 未開封の食品が食べずに捨てられている  
 ※2 野菜の皮をむきすぎると食べられる部分が捨てられている  
 消費者庁「食品ロス削減関係参考資料」(2020年6月23日版)より作成

【年末年始の発行について】年内の最終号は12月17日号です。12月24日号は休刊となり、1月1日号新年号12頁(1月9日号と合併)は12月20日の週に届きます。1月の通常号は16日号からです。編集部

